

第10回富士山世界文化遺産学術委員会議事録

日時：平成30年2月15日（金）14：05～16：00

場所：全国都市会館 第1会議室

1．開会

山梨県県民生活部 上野次長より開会挨拶

2．議事

(1) 保全状況報告書（案）について

（ヴィジョンに基づく保存管理の状況） （巡礼路の特定）について

入倉課長： 資料1 , 章を説明。

吉田委員： 2pの図が、イメージ化されすぎて、逆に分かりにくい。富士山を上空から見た場合、真ん中に富士山本体とその他の構成資産をサテライト的に1つにつないだ「ひとつの存在」があって、その周りに「文化的景観」があるという図の方が、イメージしやすい。

入倉課長： 様々な意見を聞きながら、より分かり易くなるよう検討する。

清雲委員： 巡礼路が実際、適切に保全・活用されているかどうかという問題がある。例えば、吉田口二合目の浅間社（御室浅間神社）の拝殿が手入れをされずそのままとなっている。また、馬返から五合目までの間にあった信仰的な施設は失われたままになっている。麓からの登山を進める際、これらの問題を解決しなければいけない。

遠山委員長： 大変緻密な調査はされているが、さまざまな細かい巡礼路があったことを明らかにすることだけが目的ではなく、代表的な巡礼路を辿って、重要な遺跡を保全するという形に繋げることが大切ではないか。

田畑委員： 一合目から五合目、六合目位までの植物で緑色に見える部分は、重要な場所である。下方には市街地化されている部分もあるが、景観や人との関わりの中で、緑に見える部分や、巡礼路を維持している周辺の森林地帯等をどう保全していくかが問題である。このようなことをヴィジョンに記述した方が良いのではないか。

加藤委員： 「ひとつの存在（an entity）」や「ひとつ（一体）の文化的景観（a cultural landscape）」という言葉が分かりにくい。標準的な日本語で記載するとしたら、「一体として捉え、総合的（統合的）観点から管理する」となる。そうすれば、25の構成遺産を全体として、さらに一つ一つの構成資産から周囲を眺望した時の雰囲気、風景なども含め、私達は十分理解して、このような調査研究を行い、成果を出していることとなる。緩衝地域も含めて一体として捉え、総合的観点から保全・活用していると、もう少し強く表記しても良いのではないか。

遠山委員長： 大事な問題である。ここで文章を変更することは困難であるため、これらの意見を十分勘案し、若干でも反映する方向で纏めていただきたい。

加藤委員： 日本語で強く表現しなければ、私達が意図する英訳にならない。このように取り

組んでいることを、日本語としては強く主張しておくべきだと思う。

(来訪者管理戦略) (登山道等の保全手法) (情報提供戦略)について

入倉課長： 資料1 , , 章を説明。

吉田委員： 来訪者管理戦略について、小委員会や前回の学術委員会で申した、目標の定め方などが改善され、非常に良くなったと思う。

アンケートは回答者によって多少左右されるので、やむを得ない部分もあるが、15%の登山者がごみを見掛けたという結果は、結構多いのではないかと。可能であれば、ごみを見掛けた登山者の割合や、トイレなどで不便を感じた登山者の割合は、1割以下を目標に進めていただきたい。途中経過となる2019年の水準・目標になると思うが、不満を持つ登山者の割合を可能な限り少なくした方が良い。

登山者数の部分は、2,000人/日、4,000人/日を1人でも超えれば規制すると誤解されぬよう説明し、しっかりとした調査の結果、著しい混雑を解消するには、このような指標で考えるのだということを理解してもらおう。

この目標をいかに実現するかが問題である。実現に向けて、昨年の夏に実施した混雑予想カレンダーの情報提供は比較的有効だったのではないかと。混雑予想カレンダーによる情報提供の継続、シャトルバス運行時間の見直し、マイカー規制などは、比較的有効と思うので、引き続き注力いただきたい。

遠山委員長： 極めて限定的な日・時間・場所で発生する著しい混雑を、どう回避するかという焦点が明確になったことは、非常に大きな成果だったと思う。

対策についても、混雑予想カレンダーなどは、ホームページ等で周知するだけでなく、混雑日に五合目で広報する。また、御来光は、山頂以外の山小屋や五合目などでも見られるといった、具体的な内容や情報発信方法を両県で工夫していただきたい。

加藤委員： ここまでまとまった報告書を、あとはどのようにうまく使用するかが大切である。30pに「登山者数別の登山者密度等の変化(シミュレーション)」とあるが、シミュレーションを行ったのは登山者密度だけで、登山者意識は実際に行ったアンケート調査の結果なのではないか。

入倉課長： アンケート調査結果も、計算値である。

加藤委員： それはシミュレーションではなく、実際のアンケート結果から、この程度の人数なら、この程度の回答が出るという平均値である。登山者密度はシミュレーションで、登山者意識や写真は、それに対応する日時に行った調査結果だと明記した方が良い。

また、29pの収容力の説明は、一般には分かりにくい。ユネスコの3つの収容力の考え方のうち「生態的収容力」は、富士山の、特に五合目から上方については、現状、大きな影響はないと想定し除外した。そして、「物理的収容力」では、登山道という物理的な施設にどれだけの人が入れるか、あるいはどれだけ以上の人が入ったら混雑するかという状況をシミュレートした。さらに、そのシミュレ

ーションで想定した登山者数の日に、登山者がどう感じたかを、「社会的収容力」の観点から掛け合わせた。こうした情報を総合し 32p 以下の成果になったということである。

また、23p の「調査研究結果の概要」の登山者意識について、黒丸 2 つ目の「総合満足度」は誤りで、「『総合的に満足した』、『神聖さを感じた』等は登山者数に関係なく一定割合存在」あるいは「登山者数との関連性は弱い」、とすべきである。そして、第 2 期、第 3 期では、登山者数との関連性が弱い部分に焦点を当て、どうしたら登山者がより満足を感じるか、あるいはより神聖さを感じるかという目標になっていくと思う。

吉田委員：先ほどの満足度は、4,000 人とか 4,500 人という区切りの良い登山者数の日に調査をしていないため、実際にアンケート調査を行った日の登山者数から、直線回帰で求めている数値である。シミュレーションといえばシミュレーションではあるが、その基になっているデータは実際の数値だと理解している。

北村委員：混雑予想カレンダーの戦略は非常に有用な感じがする。さらに言えば、事前に登山を計画する際に、土日や夏休みの土日は混雑する、あるいは逆に、空いていてお勤めの登山日があるという情報を、例えば吉田口ならば、五合目より手前で、中央道の混雑情報とともに発信できると良い。このようなデータ取得や分析は困難かもしれないが。

また、40p の導流堤の修景について、天端は現場にあるものを並べれば良いのだが、問題は側面の部分である。もう少し研究する余地があると思う。今後、建設するとしたら、どういうものが良いのか。強度と景観の両立が、技術的に可能なか否かということである。現状は厳しいが、対症療法的に現存の導流堤の処理としては、色彩が一番周りになじむということだと思う。そして、今後建設しようとする場合、どのようなものが有用かを、少し検討していく必要がある。これは研究課題であると思っている。現状はこれでやむを得ないと思っている。このような今後の検討も進めていきたいという記述があると良いと思う。

田畑委員：このような人工構造物を建設しても、すぐに流されてしまうのではないか。小手先だけではなく、今まで何百年の取組と結果を、よく調べていると思うので、よく検討し、整理してはどうか。

入倉課長：人工構造物については、過去の落石事故を受けて整備しており、事務局としては、保全と活用のバランスを取るため、景観にマッチするよう整備するしかないと考えている。

北村委員：山小屋について、富士山らしい山小屋の在り方を研究されていると聞いている。本報告書で提案している、可能な限り目立たぬようにする方向は短期的なものだと思う。長期的には、建て替え時に、富士山らしい山小屋を実践に移してもらいたい。

また、谷側にせり出す建物は解消し、屋根は両勾配よりも片流れの方が土石流を受け流しやすいと感じる。このような構造面も含め検討いただきたい。

(危機管理戦略), (開発の制御), (経過観察指標の強化)について

入倉課長： 資料1 , , 章を説明。

田畑委員： 危機管理戦略について、集中豪雨などによる水害のデータが全く掲載されていない。河川関係を中心に、水害や水質の内容が落ちているのではないか。

遠山委員長： 富士山に降る雨や雪は多くの場合、地下に浸透して湧水として出てくる。降った雨や雪が表面を流れ、川のようなものとなり、被害が発生したことはあるか。

田畑委員： もちろん、下流の方ではある。全て地下に浸透することはあり得ない。集中豪雨で生じる問題を整理する必要がある。

上野次長： 基本的に山体では、降水は溶岩に浸透していくので、降雨中に大きな水流が出現することは殆どない。ただ、雪解け時に、雪代(ゆきしろ)という雪と土砂が混在したものが市街地に流れ込む独特の被害があり、大きな被害を与えたこともある。実際、雪代により市街地の形成が阻害されたり、集落が移転したりした歴史もあるが、ここ30年、40年は具体的な被害はない。

田畑委員： 水理学や水門学の専門家から、深刻なデータが出ている気がする。富士山の上の方はともかく、ゼロメートル地帯まで水門学的、水利学的なデータを整理しておいた方がいいと思う。

上野次長： 山梨県では富士山科学研究所で、富士山を中心とした水門学の研究に取り組んでいる。これらのデータも併せながら、整理方法を相談させていただきたい。

加藤委員： 富士箱根伊豆国立公園の公園管理計画における、開発制御の取組等があれば、この報告書に記載できると思うが、何かあるか。

澤所長： 富士山域を中心に大部分は国立公園内であり、既存の規制については改めてこの報告書には記載していない。また、国立公園の計画の点検は定期的に行っているが、現在進行中の点検では、新たな規制強化は位置付けられておらず、本報告書に記載すべき事項はない。今後、地域での議論の進捗に応じ、記載の在り方を見直すことはあり得る。

吉田委員： 危機管理戦略について、特に富士山は外国人の観光客・登山者が多いため、有事の際に家族へ連絡することなどは不可能に近い。今後の課題として、山頂を目指す登山者全員が、スマートフォンアプリなどで登録すること検討する必要がある。

また、富士山保全協力金は、屋久島などより協力率が低い。外国人登山者が多く、協力金制度の周知が徹底されていないかもしれないが、登山届と併せ協力金の義務化も、これから必要なのではないか。報告書にすぐに記載して欲しいということではないが、問題提起する。

清雲委員： 御中道に三柱(みはしら)神社という建物があり、その中に江戸時代から明治・大正時代にかけて関東一円から盛んに来た富士講の信者が奉納したマネキが100点以上ある。このままでは、いずれ失われてしまう。何か対策をとれないか。

入倉課長： 教育委員会や関係者等と協議していきたい。

遠山委員長： 両県にセンターが完成したので、この報告書を提出して終了ではなく、継続的に、

信仰に関すること、芸術に関することの方向性を探求することが、両県の仕事だ
と思う。

高階副委員長： 大変うまくまとめられており、報告書として良いものになりそうな気がする。あ
ちらこちらに点在する様々な構成資産が信仰の対象であり、芸術の源泉である富
士山の価値と結び付いているがゆえに、意味がある。「ひとつの存在」という言
葉はよく理解できないが、中身は「一体化したつながり」として共通理解を得
て、英訳時に改めて「entity」と言えばよい。

この一体化したつながりに関して、富士山世界遺産センターは、信仰・芸術の
方向性を調べると同時に、信仰・芸術に関する様々な価値を外国の方も含めて人々
に知らせるといふ非常に重要な役割がある。田畑委員から富士山の緑の発言を聞
いてすぐ、「不二ひとつ うづみのこして 若葉かな」という蕪村の句を思い浮
かべた。富士山の景観が優れた芸術と結び付いていることを紹介することも富士
山の保存に役立つと思う。

また、具体的な参考資料、写真も使用しており大変分かりやすいが、富士山が
ほとんど出てこない。富士山が写っているものがあれば、それを出した方がガイ
ドにもなり、より分かりやすいのではないか。

(2) その他

事務局： 資料2を説明。

加藤委員： 学術委員会の基本的な仕事は、地元関係者が積極的に取り組んでいる富士山の現
实的・具体的な管理について、外部からの意見という形で援助することだと思う。
今後のより良い管理に向けた対策についてもスケジュールに入れて欲しい。

以上